飯田の食文化、海外輸出展開へ
新たな市場創出と販路開拓を目指す
飯田漬物協会

山本代表（グローバルパートナーズ㈱）

森川代表（大福㈱）

（1面からの続き）

午後3時から谷口春之副会長が司会を務め、開会に先立ち稲垣会長は厳しい経済情勢に言及し、「組合員が減少する中で、価格競争で市場を取り合うのではなく、新たな市場創出と販路開拓の推進に向けて事業を推進して参りたいと考えております。

昨今、インバウンド需要取り込みへの動きが注目される中で、我々もここで踏みとどまることなく新たな事業推進を目指して行くべきと考え、今回お二方の講師をお招きしました。

是非、ここ飯田から積極的に海外に向けた食文化の発信に努めて参りたいと思います。これから、飯田の食文化が自立した産業として活性化すると共に一層の発展を目指し、様々な事業に取り組んで参りますので、何卒ご協力賜りますようよろしくお願いいたします」と述べ謝意を表した。

▽講演(1)「海外（ドバイ）販路開拓支援と今後の展望」

グローバルパートナーズ㈱　山本康二代表取締役社長

光通信社でインターネット普及に取り組み、その後㈱グローバルパートナーズを立ち上げた山本社長は、海外輸出を目指し日本の優れた製品を集めたインターネット販売事業を立ち上げるも課題が立ちはだかる。

ネット通販を利用した海外への輸出事業を画策するが、様々な障壁があったようだ。海外から評価の高い日本製品であるが、すべての製品が海外向けに提案できるものではない。そこには、その国の文化・様式に合わせたアレンジが必要で、またそれ以上に信頼を築きながら丁寧に提案し続けなければならないという。

山本社長は改めて〝FACE TO FACE〟でバイヤーと信頼関係を築くことが必要と強調する。また、現地においては試食等から消費者の声を聞き、流通から小売りまでの一貫した現地スタッフの教育が必要という。

経営講習会を開催

また海外進出においては、今後の人口動向を見据えた上で、今から積極的に取り組みを推進するべきと指摘。例えば、高齢世代の増加によって介護食品やそれに付随するあらゆるサービス事業が急伸し市場が拡大しているが、高齢世代も近い将来その増加は横ばいとなる。その為、これから確実に減速すると指摘。

そのようなことから、国内における産業に、期待できる未来は無いと言えるのかもしれない。

加えて、今後世界の人口が増加していく中で、日本のように人口減少によって衰退していく国もあり、その中で確実にマーケットに進出できる市場を目指さなくてはならない。その中でドバイが注目されるのは、何の産業もない中、発想の転換で商業都市として展開していることを要因としている。交流都市としての素地はあったのだろうが、世界最高の空港が建設され商人が行き交う町として今なお発展途上にあるのは、近隣へのアクセスの中心的な都市に変貌し、今後益々の発展が見込まれている。

現在、この国にジャパントレードセンターが建設され、山本氏は日本を代表する製品・サービスを集め、営業窓口となって各事業社の積極的なサポートを行っており、国内の優れた商品の提案に奔走している。

▽講演(2)「世界で評価される日本食注目のマーケットロシアその理由と将来性について」

大福㈱　森川洋一代表取締役

大福（DAFU）㈱の森川社長は、ロシアは非常に親日で、日本の深い歴史やものづくりに対し高く評価しており、中でも健康長寿を支える和食への関心・注目は高いと強調する。

ロシアでは平均寿命が非常に低く、これは国内でも大きな社会問題となっているようである。

同国では、野菜の摂取が低くはないものの、生野菜では塩漬けされたものがほとんどで（その為、塩分摂取が非常に高い）、またウォッカのように非常に強い酒を飲むことでも有名であるが、この為、高脂血症や脳血管障害が多く短命であることの要因としてあげられているようだ。

そのようなことから、日本食への要望・問い合わせは多く、中でも血栓を溶かす納豆キナーゼへの関心が高いという。

食の傾向としてもソースを多用するヨーロッパの中で素材を活かした料理や酢漬などもよく食べられている。そのことからも、親日国の中でも日本食がマッチするのではないかと指摘された。

また昨年のクリミア問題をはじめ、エジプトやトルコとも断絶しており、近隣諸国に食料を依存している同国にとっては死活問題といえる食料問題が課題となっている。歴史的にも深いつながりのある日本においては、今後の動向が非常に注視されるだろう。その為、両国が緊密な関係を向上させることで、日本の輸出産業の活性化も非常に期待できるのかもしれない。